

令和7年度 岐阜県立木工芸術スクール活性化検討会 議事要旨

1 開催日時及び場所

令和7年10月30日(木) 13時30分～15時
木工芸術スクール(視聴覚室)

2 出席者

水小瀬 直樹会長、阿部 亮佑委員、岩田 翔馬委員、藤原 広行委員、臼田 陽子委員、脇田 誠委員、岩島 義則委員、二村 伸一委員、番場 智徳委員、池尾 義之委員 以上10名

3 事務局

【岐阜県商工労働部】

田口次長、労働雇用課障がい者就労推進監、同職業能力開発係長、同主査

【木工芸術スクール】

校長、課長補佐兼管理調整係長、訓練指導員

4 会議の概要

・あいさつ ・資料説明 ・意見交換

5 主な意見

【入校生の確保について】

○スクールには、魅力あるカリキュラムと施設設備、豊富な講師陣を有するという特徴を前面に出して入校生募集をしてほしい。

○今まで地域や教育機関と連携して、職業体験、ふるさと学習及び工場見学・工作コンクール・家具フェスなど地域イベントの強化を行い子供たちに地元産業の魅力を伝える広報活動を充実してきたが、不登校増加や学習時間削減の流れを踏まえ、柔軟な教育や広報活動が必要ではないか。

【修了生の就職支援について】

○インターンシップ前の工場見学会は本当にいいことである。ミスマッチを防ぐためにも是非、継続してやってほしい。

・この委員会で提案のあった工場見学会の効果が大きく、令和6年度は29名中16名が飛騨地域へ就職している。ただ、新たな課題として、早期退職が最近多くなってきたので、もっときめ細かいマッチングをスクールとしても努力しなければならない。

○早期退職が最近多くなってきたのは、賃金水準や仕事の内容と期待のギャップが要因ではないか。

○修了生の進路のひとつとして、木育の担い手になって、飛騨地域の魅力を知り、結果として飛騨に定着していくこともいいのではないか。

○スクールだけではなく、木工全体として活性化を図るという視点で捉えていくべきだと思う。キーワードの一つとして「給与水準」は間違いなく外しては考えられない問題だと思う。賃金水準や行政支援を含めた木工産業全体の活性化が必要。

【その他】

○木工芸術スクールを活性化でなくても魅力化の方向でいいのではないか。

○メーカーに勤めてギャップを感じた場合、卒業後のプライベートでのものづくり継続はハードルが高い。修了生にはシェア工房や設備貸出のニーズがある。フォーラム飛騨の木工室復活案があるが安全管理・指導体制が課題である。

・飛騨の木工技術は進歩が遅く、賃金の低さが最大の問題。カリモクの事例として効率的な工程と最新設備で利益を確保している。世界の家具づくりはNC加工や合板利用など効率化が進んでいる。飛騨は伝統的な天然木材を使うが、最新設備導入の検討が必要だと思う。

○技能検定の課題として、受講者不足により高山で試験実施できず、岐阜まで移動した。できれば受験者が少なくとも高山開催を検討してほしい。

○在職者訓練（平日夜・年間約10回）をスクールにて継続開催してほしい。また技能検定取得に関する支援（講習・試験会場提供）も引き続きお願いしたい。

○専門職の魅力向上には「給与アップ+研修」が不可欠だと思う。

○最新設備導入と訓練活用で新しいものづくりを推進する方向も考えてはどうか。カリキュラムの魅力化、行政・企業・学校の連携強化で地域産業の活性化及び技術革新と伝統の融合による競争力強化を図ってみては。

- ・飛騨の伝統技術+最新加工技術の融合モデルを検討
- ・NC加工や効率化技術の教育カリキュラムへの組み込み
- ・デザイン力を活かした高付加価値製品の開発支援